日記の一節

坂内ミツ

一日の仕事を了へてから巣鴨に櫻諷會の託兒所を訪れた、かねて願つて置いた兒童愛護デーの事につき打合をするためであつた。

もう六時にならうとして居るのに五十人許りの子供等は嬉しそうに遊んで居る、先生方はまめやかに子供の世話をして居られる、其間に遊戯室や廊下に雑巾をかけて居られた、小使の女はせつせと子供等の前掛其他を洗濯して居つた一時や二時に子供をかへして疲れたといつて居る自分等が恥かしくなつた、其内にポツ〳〵母親が迎に見えた、朝早くから勞働して疲れては歸つたが一日顔を見なかつた我子の手をとり、託兒所の御恩を感謝しつゝ我家を指して歸る母親の顔には輝きがあつた、其内の一人は特に丸山先生に御目にかゝつて一枚の子供の著物を見せ「先生今日漸く出來上りました。明日から著せられます」といつて喜んでかへつた、この母親は三人の子供を手一つに育てる爲め一日働いて居るが裁縫する時間がないので晝食後人の休む時間を利用して子供の著物を縫つて著せて居るのであると後から承つた。

其内に立派な服裝をした束髪の婦人が丸山さんを訪ねて來られた。この婦人は過日行はれた慈善音樂會の切符を返しに來られたのである、五十錢の入場券を三枚出して「あの時御預りしましたが賣れませんでした、おそくなりましたけれど」と殊勝らしくいひわけされた、それにつゞく話を傍で聞いて居ると面白い、「今日は久しぶりで髪結に參りましたのよ、六十錢だといひましたから祝儀を一圓おいて來ました、歸りに三越によりましたらよい柄がありましたよ遂金紗の半コートを一枚誂へて來ましたの、自動車で歸りましたが女中を連れてゞせう、高いものになりましたよオホ、」と得意らしく髪を撫でゝ見た、私は驚いた、自分の耳を信じなかつた、何といふ不思議な事でせう壹圓五拾錢の慈善券を返しに來

た人がどうして髪結に壹圓五拾錢支拂ふのを惜しいとは思はないでせう、自動車に乘るのを電車にして其切符を買ふ事に氣がつかないでせう、當の本人は少しもそれを不思議とも思はなければ恥かしいとも勿論思はない、後で伺へばこの婦人は高等の敎育を受けた人でしかも頭腦の明晰だつた人であるのに、結婚後いつの間にか頭が惡くなり神經が鈍つてしまつたのである、惡氣があるのではない全く氣がつかない程に神經が鈍つてしまつたといふのはさてもさても誰の罪でせうか、家庭も社會も其責任の幾分を負はねばならぬのではありますまいか、たゞ其人一人を責めることは出來ないと思ふ。

長い日も黃昏近い氷川下の邊にはミソコシを前掛の下にいれて忙はしそうに走つて居るおかみさんの姿を多く認めれた、無量のお土產をいたゞいたのでどこをどう歸つたか記憶して居らない母さんずい分おそいのねと出迎へる子供等の手をとつて我にかへつた。

○北海道の幼稚園

公立茶津尋常小學校附屬幼稚園	室蘭區母戀茶津
ロース幼稚園	小樽區富岡町一ノ一六
私立小樽幼稚園	小樽住江町一ノ二二
私立函館幼稚園	函館區榮町二二三
遺愛幼稚園	函館區元町五三
私立根室佛敎幼稚園	根室區根室町彌榮町二ノ六
私立札幌基督組合敎會幼稚園	札幌區大通西一ノ一四
私立札幌若葉幼稚園	札幌區北二條西二丁目
私立釧路幼稚園	釧路區米町一三四
私立精華女學校附屬幼稚園	旭川區四條通十一丁目
私立倶知安幼稚園	虻田郡知安町南一線西五五